

美術教育研究の内容と方法

—教師教育の基盤—

岐阜大学教育学部美術教育講座 辻 泰 秀

1. はじめに

学生や現職教員が美術教育の研究を始めるにあたって、美術教育において何を研究するのかを知ることが求められる。美術教育学はどのような内容を含むのか、いかなる研究が可能かを理解することによって、自己の研究の目的や内容が明確になる。図工・美術科の教師教育のために、美術教育研究の全体像を明らかにしていく必要がある。また、美術教育研究のうち、従来から実践研究の重要性について指摘されながらも、実践論文の質的な充実につながっているとは言い難いのが現状である。大学の研究者と教育現場との連携が十分でなかったり、教師の多忙さが起因している。本稿では、どのように実践研究を進めるべきか、実践論文に必要なことは何かについても明かにする。

2. 美術教育研究の対象や範囲

美術教育は、比較的新しい研究分野である。昭和50年代に現職教員の研修や理論的・実践的な教育研究を推進することを目的とした新構想の大学院が設置されたのに伴い、各地の教員養成学部でも教科教育の修士課程が整備された。大学院レベルの研究の進展につれて美術教育を専門にする研究者が増加し、美術教育関連の学会において論文や口頭での研究発表が数多く行われるようになった。美術教育学という学問が既に成立していたわけではなく、美学・美術史・心理学・教育学等の学問分野の成果を活用することによって研究が蓄積され、美術教育学というべき体系が整ってきた¹⁾。研究動向を把握するために、「美術教育学研究の対象・範囲」を以下のような項目にまとめてみた²⁾。

①美術教育論—美術や教育についての先行研究をもとに、美術教育の意義・理念・目標を示す。教育学（人間形成における美術の役割、子育て・児童中心主義・感覚教育・遊び論から造形活動の意義を述べる）、哲学及び美学（美術教育における感性・美意識・想像力の育成について、美術理論の立場から述べる）、造形論及び文化人類学（人類の発展にとって造形活動が重要であることを論じる）、心理学（美術表現が心の状態を推察する深層心理学や脳の働きを調べる認知心理学と関連が深いことを示す）、記号論（文字や数字と同様に視覚的な情報が学習に関係することを述べる）。美術の実技制作とともに文献を解読する機会を設ける。

②美術教育史—学校教育における美術教育の歴史を示す。教科名・制度・思想・教科書・実践等の歴史を文献をもとに明らかにする。西洋画（鉛筆画）の移入・国粹主義の毛筆画教育・鉛筆画と毛筆画の得失論争・教育的図画と『新定画帖』・自由画教育・構成教育・手工教育・『小学図画』・戦後の民間美術教育運動（創造主義・生活認識主義・造形主義）・学習指導要領の変遷等について述べる。

山形寛『日本美術教育史』等の基本文献に示されていることが実際と異なっていたり、地方の教育実践・個々の美術教育関係者の言説・海外との比較教育史についての研究が十分に行われていない。文献資料にもとづく美術教育史の検証とともに、教育史から何を学ぶかという温故知新的な視点が必要である。

③**発達研究及び科学的リサーチ**—幼児～児童～青年期といった描画の発達の道筋を示す。リュケ・グッドナウ・ローウェンフェルド・アルンハイム・ケロッグ・ブリテン・ウイルソンをはじめとした先行研究を理解する。日本では東山明・鬼丸吉弘らの研究がある。子どもの絵の特徴、造形表現のタイプや性差に関しても把握する。ローウェンフェルドの発達論が定説になってきたが、近年では、マンガ等の現代の視覚文化の影響を指摘したウイルソン、認知心理学を援用しているガードナー、記述的リサーチの手法をとるバイテルの研究が着目されている。実態調査をもとに理論を導くリサーチ・メソッドの研究方法も紹介されている。

④**諸外国の美術教育**—チゼック・リード・ローウェンフェルド・バイテル・アイスナー・ガードナーといった海外の美術教育論を理解する。チゼック・リード・ローウェンフェルドといった子ども中心の創造主義の系譜と、アイスナー以降のDBAEに見られるような学問性重視・教科主義の立場をとるカリキュラム開発の動向がある。アメリカやイギリスに加えて、ドイツのミュズ教育・シュタイナー・オットー、北欧のスロイド教育、フランスのフレネ教育、イタリアのレッキョエミリアの幼児教育、フィンランドの現状に関する研究もある。従来は文献研究が中心であったが、最近では国際学会・視察・インターネット等による交流が行われ、海外の現状調査や比較教育の研究が進んでいる。

⑤**授業実践**—カリキュラム、教材や指導の実践内容を示す。教育現場における実践研究の中心が、教材づくりや授業実践の内容になっている。

- *カリキュラムの実際—小・中・高等学校の教科の教材の選択と配列、総合と合科、教科間の比較と連携、個性化と個別化、生涯教育、特別支援教育 他。
- *教科書—現在の小・中・高等学校の教科書の内容分析、編集方針、系統性、題材の構成、記述方法、掲載作家や作品 他。
- *学習指導要領—教育や社会の動向、目標と教育内容、区分と配列 他。
- *教材論—教材開発、授業設計、学習指導案、教材づくり、試作や模擬授業、授業展開、教育資料 他。
- *教育環境—人的環境、ティーム・ティーチング、コーナー制、材料、場所 他。
- *評価論—教師と子どもの相互関係（支援）、実態把握、授業観察と記録、ポートフォリオ、分析と省察、作品評価、授業改善 他。

⑥**絵画・版画領域**—描画指導の内容と方法を示す。児童画論、幼児から大人の絵の特徴、描画に関する教材の開発、主題や題材、個性への対応及び絵画表現の広がり（具象と抽象、観察画と想像画）、描画指導をめぐる論争（「創美」と「新しい絵の会」）、作品主義（教師主導）から過程重視（子ども主体）へ、発想・イメージ論（感動先行と映像先行）、指導技術の法則・方式の普及の是非、描画の材料や用具、描画の技法と指導法、版画の種類と技法 他。

⑦**彫刻・彫塑領域**—彫刻指導の内容と方法を示す。粘土・木・石・金属・樹脂等の素材の特徴と表現方法、モデリングとカービング、立体造形とレリーフ、触覚体験及び可塑性、量感や空間性、具象と抽象、古代彫刻～現代彫刻の教育内容、発達（幼・小・中・高）と指導、立体の教材開発 他。

⑧**デザイン領域**—デザイン学習の内容や方法を示す。デザインとは何か、デザインの分類や役割、造形思考や発想、問題解決、デザイン教材の実践事例、平面構成、イラスト、錯視、色彩、サイン、ポスター、モダンテクニック、立体構成、バウハウス、他。

⑨**映像メディア表現領域**—現代の視覚文化の普及に伴い、図工・美術科における映像メディア表現に関する実践例を示すことが課題になっている。映像表現の教材づくり、コンピューターによる表現と鑑賞、アニメー

ション、写真（デジタルカメラ等による表現と鑑賞）、映像メディアの活用と教材開発 他。

⑩**工作・工芸領域**—ものづくり教育の内容や実践例を示す。手仕事の意味と指導、地域の伝統工芸の体験学習、工作・工芸の教材づくり、用途と造形、用具の種類と使用法、紙工作・木工・竹工作・陶芸・染色・金工・七宝焼・草工芸・ガラス工芸、伝統性と現代性、玩具 他。

⑪**鑑賞教育及び美術館教育**—鑑賞指導の内容や方法を示す。美術鑑賞の意味や魅力、教材内容（取り上げる様式・作家・作品、西洋美術と日本美術、純粋美術と現代美術）、鑑賞と表現の一体化、学校と美術館との連携（美術館の活用）、鑑賞教材の開発、セルフガイドやワークシート、アートゲーム、比較鑑賞、対話型鑑賞法、美術批評（記述・分析・解釈・評価）、図工・美術科における言語活動の目的と実践 他。

⑫**「造形遊び」及び多領域**—「造形遊び」は小学校図工科の学習指導要領の根幹になっているので、「造形遊び」のねらい・特徴を明かにする。また、美術表現の広がりとともに現代美術の教材化を試みる。材料（モノ）と場所（場）の多様性、「造形遊び」の位置付けと実践事例、子どもの活動、支援と評価、身体や自然体験、現代美術の作家や作品、美術教育における現代美術の位置付けと授業展開 他。

⑬**教員養成学部における美術教育・教師の力量形成**—教員養成学部における実践や授業改善に関して示す。教員免許状更新講習をはじめとした現職教員の研修の目的や実際についても明かにする。指導内容、教員養成や教師教育の方法、教育実習、教師としての資質や力量形成 他。

教育や社会の変化に伴って、およそ10年ごとに学習指導要領の改訂が行われ、美術教育の研究内容の動向にも反映されている。子どもの自己学習能力の育成が課題であった時期には、材料や場所にかかわり子ども自身が選択・判断する「造形遊び」が着目された。近年は、マルチメディアの普及に伴う映像メディア表現、生涯学習時代への対応として鑑賞教育をテーマとした研究論文や口頭発表が増加している。また、大学院における美術教育研究の蓄積とともに、美術教育の各分野での専門性も高まってきている。

学部や大学院において美術教育研究を始めるに際して、広く研究分野や範囲を見通した上で自己のテーマを設定するのが望ましい。けれども、たまたま講義で取り上げた内容や大学教員の専門分野にテーマが片寄る傾向がある。近年はインターネット等によって学会誌・研究報告等が公表されているので、上記の各分野について現在までの研究内容を広く理解してほしいと考える。また、文献やインターネットの記述と類似したレポートを見かけることもあるので、引用方法についての理解や記述内容の検証も行うようにしたい。

3. 実践研究の方法—教材の実践報告・事例研究として必要な内容—

(1) 実践の記録

図工・美術科の授業実践は、全国各地で日々行われている。ところが、具体的な内容を知る手立ては十分ではない。授業研究に関心があり、意図的に文章や映像で記録をとどめている場合を除いて、大部分は時間の経過とともに消えてしまっている。山形寛の『日本美術教育史』は1000頁近くの文献で、明治時代以降の美術教育の歴史について詳述されているが、教育現場の教師の授業実践の記録ではなく、教育制度・法令・教科書等の内容によって編集されている³⁾。文部省から文面で示されたからといって、そのまま教育現場で実践されていたわけではないので、美術教育の記録としては一面的である。また、過去の卒業製作の作品等が保管されていて多くの児童画が見つかることがある。児童の作品を見ることによって、教育実践の成果を知る手掛かりになるが、どのような指導が行われていたのかは、推測の範囲に限られてくる。近年でも、特色のある実践の様子を聞くことがある。独創的な環境づくりをしたり巧みな言葉がけで子どもたちの造形

意欲を喚起したという授業観察や口述の記録である。もし、ビデオの映像や音声による実践記録が残っていれば、その場の雰囲気、教師の働きかけや子どもの反応といったものを具体的に理解することができる。そして、教師自身が授業のねらいや内容について文章を残すことによって、背景にある教育観・授業観を知る手立てになるはずである。これからの授業研究の資料として活用するために、少なくとも現在行われている実践について、映像や音声・記述として記録したり、論文にまとめることが大切である⁴⁾。

(2) テーマの設定

授業実践は教育現場で行われているが、それが実践研究や論文とは直結していない。教師は教科の授業実践はもちろん、学級経営・生活指導・校務分掌等多忙を極めている。文献を読む・実践の記録をまとめる・論文を記述するといった教育研究が重要であることは理解しながらも、その機会を十分にもてないのも確かである。ただし、社会や教育を取り巻く現在の状況から、従来までは経験や勘で行われる傾向があった教育実践についても、実践論文の作成や実践内容の評価を通して学術的に構築することが求められている。

教師が実践報告や教材事例について論述するのに必要な内容は何か、すなわち、実践論文の要件についての共通理解が十分になされていない。もちろん、文章の書き方や構成には個性があってもよい。独創性は実践研究のポイントでもある。ただし実践研究は、自己の考えを深めるだけでなく、公表することによって研究内容の交流・協議をする目的をもっている。そのため、実践報告・研究が発展できるような内容や記述のし方があるはずである。

研究テーマについては、何を研究するのか、研究のねらいが何かを具体的に理解できることが求められる。たとえば「図画工作科について」「美術科の実践報告」では、テーマの示す範囲が大きいために、図画工作科や美術科の何を・どのような目的や視点で研究しているのかが伝わらない。上記のような美術教育研究の分野や範囲を参考にして具体的なテーマにしたい。また、実践報告では、教育目標がそのまま記されることが多い。「楽しい造形活動」「つくる喜び」「のびのびと表現する」「豊かな感性」という理念や子ども像は大切であるし、図工・美術科の全国大会の研究テーマにも、頻繁に見受けられる用語である。ただし、研究であるからには、何をどこまで明かにするのかが問われる。「楽しい」「喜び」「のびのび」「豊かな」といった言葉は、子どもたちや教育活動にとって大切なことではあるが、どこまで達成できたのかという評価が困難である。たとえば「楽しく表現できたかどうか」は、評価の観点があいまいで個人差も大きく、実証的に確かめることが容易ではない。評価や改善事項が具体的に把握できるテーマが望ましい。

(3) 先行研究の検討

次に、学会等の論文では先行研究の検討が問われるが、教育現場における実践報告では先行研究の明記や検討が抜けている場合が多い。文献を収集したり解読している時間がないという教育現場の状況があることにもよるが、教材や実践に関する先行研究について十分な配慮をしない習慣や姿勢も影響している。自然科学の分野では、実験結果や研究開発の公表がリアルタイムで学会や専門誌で行われており、どこまで研究が進展しているのかを確かめることから始める。もし、先行研究の調査をしないと、特許や著作権にかかわることになる。ところが、教育現場では、日常的に教材や指導方法の交流・普及が行われており、教材開発や先行研究についての配慮がいきとどいていない。たとえば、公開授業や教育研究発表会に参加する教師の多くは、「自分の学校や学級の実践に参考にする」「自分でもできるよい教材はないか」といった意識や目的で参加しており、実践の模倣や追体験を前提としている。同様の教材を自分で授業を実践したときに、このような先行研究や教材をもとにしている・参考にしたという「引用・参考文献」にあたるものを明記する環境や習慣が定着していない。実際には、全く自分の発想だけで教材開発や指導方法を考えたという場合は、むしろ稀である。先行研究をもとにすることは当然のことなので、実践にいたった経緯や教材観の中で、参考にした先行実践・文献・教科書等を明記すべきである。また、文章になっていなくても、研究協議や助言によって考えがまとまったならば、学生や教員での協議、研究者や指導助言者との相談の結果、どのような示

唆や協力を得たのかも記すのが適切である。

美術教育の研究は、他の分野に比べると歴史は長くはないし、研究者や論文の数も限られている。けれども、美術科教育学会・大学美術教育学会・日本美術教育学会・日本美術教育連合等が年度ごとに査読付の学会誌や紀要を発刊している。大学・教育研究所・附属学校からも研究紀要や報告が出されている。出版図書や指導書、『教育美術』『美育文化』をはじめとした教育雑誌もある。学校で実践をしながら全ての文献に目を通すことは物理的にできないし、それに時間や労力を取られ過ぎると、実践や子どもたちへの対応が不十分になってしまう。現実的には「この研究物では」とか「何年から何年までの文献を調査したところ」といったように、確認をした範囲を明記して先行研究の内容や有無を記すのがよい⁵⁾。

(4) 教材観の記述、教材の説明

図工・美術科の特徴の一つに、教材選択の幅が広いことがある。英語や数学等の場合には、教える内容や教材の配列が詳細に決まっいて、どのように教えるのかといった教育方法から研究が始まることが多い。教材の順番を入れ替えると、系統性が変化してしまう。図工・美術科の場合には、教科書の最初から順番に教えることは稀で、指導のねらいや子どもたちの実態等に応じて教師自身が柔軟に教材を選択する。そのため、なぜその教材を選んだのか、すなわち、教材選択の理由や着眼点について述べることになる。

同様の教材に見えても、重点の置き方によって指導内容や授業展開が変化するので、教材に関する補足説明があるとわかりやすい。～ような準備や試作をして、～といった計画を立てて実践をする、という説明になる。材料準備や試作の内容、教材づくりでの改善点、カリキュラムや指導計画の中でのその教材の位置付け、プリント・ビデオ・参考作品等の事前資料、についてを示す。教材観については、興味や関心、先行経験といった児童・生徒の実態、美術的な価値や学習する意味、指導の手順や制作過程、制作に関する技法、材料の特徴といった内容を説明に加える。

(5) 実践内容の記述

実践報告では、実践の計画（予定）と実際の実践内容のいずれかしか記されていないか、混合してしまう。計画の場合には「～をする（予定である）」といった表記になり、実際の実践内容の場合には「～した（結果になった）」という表記になる。計画したことがそのまま実践されるというよりも、授業の展開や子どもの反応に応じて柔軟に実践が変更になるはずである。計画段階では、予想される子どもの反応や教師の働きかけや留意点を述べる。そして、～といった結果になるであろうという展望も示されるのがよい。実践の結果については、時間的な経過にそって実際に行った内容を示す。いつ・どこで・何を・だれが・なぜ・どうしたかといった実践の詳細を理解する目的がある。教材の提示方法、事前学習や先行経験との関連、子どもの反応や活動状況、動作、言葉（発言やつぶやき）、表情を記述する。一口に子どもの姿といっても個人差があり、外見と内面、瞬時と長時間とでも異なるので留意したい。教師の側についても、教師の支援、一斉指導、個別指導、資料提示、対応の方法等を記述する。

(6) 実践からの考察

実践報告の目的は、実践内容を具体的に伝えることにあるが、実践にもとづく研究に近づけるためには、実践からの振り返りや考察が求められる⁶⁾。実践からどのような方法で何を考察するのが理解できないことがある。そのため、考察の視点や方法を以下に記す。

- 子どもたちの口頭での感想、レポート等を考察する。子どもたち一人ひとりが何を理解し、何を感じていたのかを知る。
- 活動のメモ、写真、ビデオ記録等をもとにして、実践内容の説明をする。記録からの指導内容や子どもの活動の詳細な読み取りをする。近年、デジタルカメラやスキャナーの普及とともに、写真や図版の羅列したレポートが増加している。授業実践の場合には、授業のねらい、授業計画、教師の助言や働きかけ、

生徒の反応や発言、作品や自己評価、教師による結果と反省等が含まれ、写真だけでは説明がつかない。文章による記述があって理解が深まる。教科書や画集の図版を引用する場合にも、教科書や画集での位置付け、選択した理由、授業での活用方法、子どもの反応等が述べられなければならない。写真や図版を羅列する場合には、本来必要な記述や比較考察を省略しているの、研究として成立しないし、資料としても片手落ちである。写真・図版を並べた文脈や根拠は自分だけが知っていればよい、資料のボリュームをかせぐことが目的である、という本音を聞くことあるが、それでは資料の収集や整理にとどまり、研究とは言い難い。

- 実践の計画と実際とを比較する。当初の予想や計画と実際との共通点と相違点を明かにする。どこがねらいと一致しており、どこが・どのような理由からズレでいったのかを分析する。教育実習生や新任教師の場合には、計画にしたがって進めようとする。一方、熟練教師の場合には、子どもの実態によって意志決定を行い柔軟に対応するという⁷⁾。
- 教師の支援や子どもの活動を振り返りながら、実践の過程を分析する。子どもの思考の道筋や深まりを把握する。実践における子どもの変容を示す。
- 一つ実践でも、授業者の視点からの振り返りと、子ども自身の立場からの振り返りをする。たとえば、教師としては多くの話や資料提示をして充実していたつもりでも、子どもは受身になり表現や鑑賞が進展しなかったという場合も出てくる。
- 子どもの作品の写真の提示と説明をする。作品の写真図版を見ながら、作品の全体の傾向・個人差等の分析をする。卓越した子どもの作品を示す事例が多いが、十分な作品の説明ではない。
- どのような成果があり、どのような点を改善すべきかを明かにする。実践報告の中には期待された成果のみを並べたものがあるが、研究としては、むしろ問題点・改善点・今後の課題が重要である。
- 実践をもとに、多くの視点からの感想や批評を示す。自分（実践者）、子どもたち、他校の図工・美術科の教諭、自分と同じ学校の教諭、大学教員や指導主事、校長等の熟練教師、新人教師や学生は、どのような感想をもったのか、どのように実践を見ていたのか明かにする。当然評価をして賛同する人がいれば、問題提起をする人もいる。タテマエあればホンネもあるはずである。実践の反省会等でどのような意見が出たのか、実践者自身の反省や感想・工夫した点も含めて示す。
- 関連する実践との比較考察。実地調査や参考文献からの確かめ。たとえば、同様の教材を他の学級・学年で実践した場合との比較をする。共通点や相違点を考察する。
- 次の計画や実践に向けての構想。授業改善や今後の取り組み。実践後にどのように展開されるのか、子どもたちや教師の今後の取り組みについて述べる。

4. まとめ

上記のことは、実践研究や事例報告に際しての留意点である。実践者自身では記述するまでもないと思われる内容でも、文章や記録にして残すことで相乗効果もたらされる。教育実践について気づいたことや考えたことの記述を通して、自己の実践を振り返り、授業改善につなげることができる。参観者であるときにも、その学校や教室の状況を知らない人に説明するように、観察したことや考察したことを丁寧に述べるようにしたい⁸⁾。具体的に詳細な文章や記録があれば、実践の内容が他者にも伝わり、教育実践をもとにした交流や研究に進展する。たとえば、指導的立場にある教師、図工・美術教師、美術教育や教育方法の研究者をはじめ多くの人から具体的な助言や支援を得ることが可能になる⁹⁾。若手教師や学生たちの貴重な参考資料にもなる。

学位論文や研究報告書では特に紙面の制約がなく詳細な内容まで記述するが、通常は割り当てられたページ数に納まるようにまとめる。論旨を明確にするために、記述や資料を精選することも多い。紙面の制限や論文の用途に応じて書式や字数を調整する段取りになるが¹⁰⁾、それ以前に基になる文章や記録を蓄積することが研究上求められる。

学校や教室で行われている教育実践は、日常の出来事のように、文章・映像・音声等で記録を残したり、記述・分析・解釈等の活動をしなければ、時間の経過とともに忘却し消えてしまう。子どもの美術の創始者ともいえるフランク・チゼック、日本の自由画教育の提唱者である山本鼎、地域の想画指導の実践者であった青木実三郎、創造美術協会の運動の中心となった北川民次などは、当時の文章や実践の記録が存在しているから¹¹⁾、現在の美術教育研究に示唆を与えている。美術教育史に足跡を残した実践に加えて、教育現場の教師によるすばらしい授業実践は数え切れないほどあるので、その詳細が報告・交流・蓄積される研究環境をつくることが課題である。

筆者も微力ではあるが、教員養成や教師教育に向けて、テーマの設定や記述のし方といった美術教育の論文の作成方法を学生たちや現職の先生方に伝えるように心掛けている。学会や大学では理論研究に比べて実践研究の量が少ない傾向があるし、教育現場においては成果の公表が優先され、問題点や改善点が十分に示されないときがある。美術教育の実践研究についての理解を深めるために、今後も継続的な取り組みをしていきたい。

注

- 1) 長町充家 美術教育研究(リサーチ)における「教材」(カリキュラム)の位置 大学美術教科教育研究会 第3号 pp.56-64。美術教育研究が多くの学問分野と関連することを指摘しながら、美術教育研究のすべての目的は「子どもを美術を通してどのように育成するか」という一点でしかないと述べている。
- 2) 本稿で示したような美術教育研究の対象や範囲をキーワードにして、研究の動向の調査と分析が可能になった。岐阜大学カリキュラム開発研究センター(現在:岐阜大学総合情報メディアセンター)の教育研究文献データベースのEDMARSに収録されている資料をもとに、それぞれの論文内容に適したキーワードを選択し、コンピュータによる解析結果から美術教育研究の動向を把握した。岐阜大学カリキュラム開発研究センター 研究報告 Vol.14 No.10 1994、を参照。
- 3) 山形寛『美術教育史』黎明書房 1967。
- 4) 美術教育における授業研究については、拙稿「授業研究の方法」(花篤實『美術教育の課題と展望』建帛社 pp.223-230)を参照。
- 5) 金子一夫は、美術教育における実践研究論文の作成方法について適切な提言をしている。金子一夫 実践研究論文の条件 美術科教育学会通信 No.74 2010、及び、実践研究論文の条件(続)美術科教育学会通信 NO.75 2010、を参照。
- 6) 佐藤学は実践の振り返りを重視する立場から「反省的実践の授業研究」を提示している。授業の事例研究には、観察と記録・記述と分析・反省と批評の三つの段階があるという。佐藤学『授業研究入門』岩波書店 1996 pp.115-139、を参照。
- 7) 教師による「意志決定」については、吉崎静夫『教師の意志決定と授業研究』ぎょうせい 1991、を参照。
- 8) アメリカの美術教育においても、統計調査等に基づく「科学的リサーチ」に加えて、観察記録や哲学的考察にもとづく「記述的リサーチ」がケネス・バイテルらによって位置付けられた。エリオット W. アイスナーの教育評価における「教育的鑑識」や「教育的批評」も、美術作品を鑑賞・批評するように、教育活動を観察・記述・批評する内容になっている。
- 9) 稲垣忠彦は、臨床医学の分野で行われているカンファレンスを参考にして、ビデオ等による授業記録をもとに協同で様々な視点から検討する活動を授業研究に取り入れた。稲垣忠彦『授業を変えるために一カンファレンスのすすめ』国土社 1986、を参照。
- 10) 教育実践の中ですぐに活用できる指導技術を端的に示す法則化の運動は、わかりやすく実効性もあることから教育現場に普及しており、美術教育でも「キミ子方式」「酒井式」が知られている。教える方法や指導技術のみが先行してしまうと、なぜ・どのようなねらいからその方法を選択するのかという教育観

や教材設定の理由の説明が不十分になりやすいという指摘がある。

- 11) ヴィオラ (深田尚彦訳) 『チェックの美術教育』黎明書房 1976、石崎和宏『フランツ・チェックの美術教育論とその方法に関する研究』建帛社 1992、山本鼎『自由画教育』黎明書房 (復刻版) 1982、青木實三郎『農山村図画教育の確立』黎明書房 (復刻版) 1982、北川民次『絵を描く子供たち』岩波書店 1952・『北川民次美術教育論集上・下』創風社 1998、を参照。それぞれの考え方や実践の内容の記録になっている。